ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文　北原 次郎太　　絵　小笠原 小夜

クイズ

道内にはアイヌ語がもとになった地名がたくさんあるよ。
あなたは読めるかな？
①釧路管内白糠町**和天別**
②渡島管内七飯町**宿野辺**川
③上川管内**剣淵**町

＝答えは紙面の下に

読んでみよう

今回は小さな「ム」や「シ」、「ラ、リ、ル、レ、ロ」の読み方です。これらはそれぞれ子音で終わる音を表しています。「ム」は子音のm、「シ」はsです。「ラ、リ、ル、レ、ロ」はどれもrの音ですが、前の音（口のあき方）によって少し聞こえ方がちがうので「ア」のあとなら「ラ」、「イ」のあとなら「リ」のように書き分けます。

「メム（わき水）」は、メと言いながらくちびるをとじます。「パラ（口）」の発音は、パのあとに短くかるくラといいます。「パ・ラ」と区切れるくらいにはっきり発音すると「はばが広い」という別の言葉になります。

「アシ（立つ）」はアのあとに、ささやくように「シ」と言います。「ア・シ」とはっきり言うと「立てる」という意味になります。

「読んでみよう」の内容を、どうしん電子版の動画コーナーを見ながら練習してみましょう。出演は札幌大学「ウレシパクラブ」のメンバーと、札幌・真駒内桜山小学校４年の河村龍平君です。スマートフォンを持っている人は、ＱＲコードから読みこんでください。

クイズの答え

①わとてんべつ　ヲフッチ（多い）・ペツ（川）。支流が多い川。明治時代には「割手別」と書かれた。
②ルルモッペ　スフプ（ウグイ）・ネツ（多い）・ペツ（川）　小魚のウグイが多い。
③ｵｲﾅｶｽﾗ　ｶﾈｲﾉｲｷ・ﾍﾂ（川）。ﾊﾝﾉｷが生えていることから名づけられた。カネヤナギ（剣淵川の河口）が多くすむことを考えた。
地名の意味は「北海道の地名」「アイヌ語地名の研究」（山田秀三著、草風館）を参考にしています。

先人たちの物語 シンリッオルシペ

監修　佐々木 利和

みんなに優しく 食べ物分け与え生活

チユヒリカという女の人は、江戸時代に天塩川が流れる士別にくらしていました。狩りをして、まわりの子供やお年寄りたちに食べ物を分けあたえていました。

和人の紀行家、松浦武四郎は女の人が狩りをする話をいくつか書き残しています。武四郎が会ったとき、チユヒリカは36歳でした。

チユヒリカにはサカイという兄がいました。サカイはチユヒリカが小さいころ、おくさんのセタトレンと運上屋に連れていかれ、そこで働かされて、それきり帰れなかったのです。

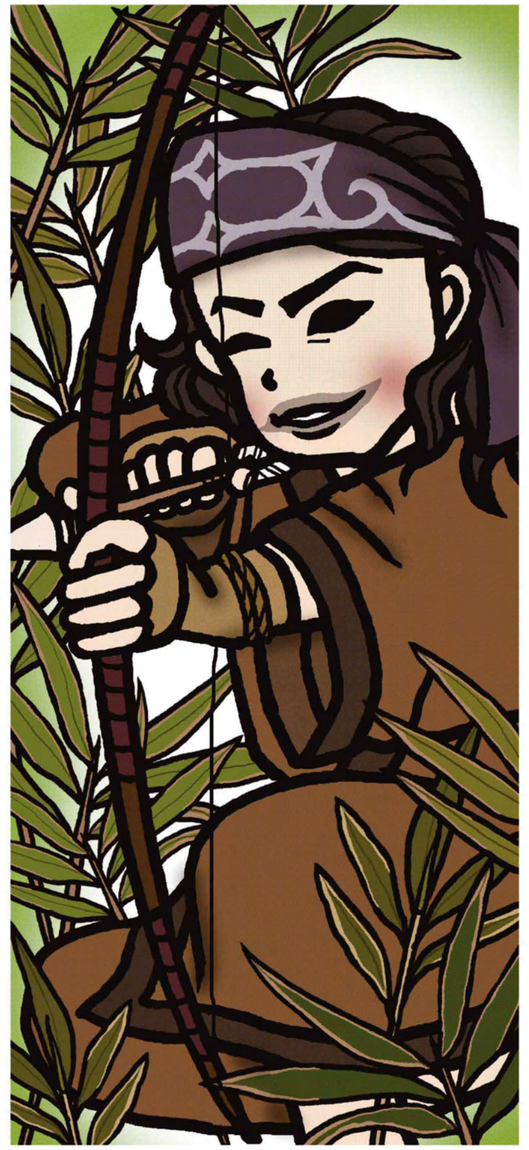
運上屋は「アイヌと和人がものを売り買いする交易場所」とされていますが、和人の商人が漁場をいとなむ事務所でもあり、無理やり働かされたアイヌの人たちがいたのです。

チユヒリカは、一人で年老いた両親の面倒を見続けました。大きくなっても、結婚相手が両親と気の合わない人だったら親がかわいそうだと思って、結婚のすすめをことわりました。

やがて両親が亡くなると、士別のウツというところに一人でくらしました。近所にエヘトレンというおばあさんがいました。その子のトシュイシユラがやはり運上屋へ連れていかれたため、一人ぼっちで山菜を食べ、破れた屋根をササでふさいで雨露をしのいでいました。チユヒリカは、おばあさんを連れてきて、わずかな食べ物を分けあって、一緒にくらしました。

また少し上流に、病気で動けないアチウテレという44歳の男性がいました。そのおくさんは運上屋へ連れていかれ、和人のおくさんにされてしまい、４年もどらないままでした。

チユヒリカは、おくさんの気持ちを思い、アチウテレを自分の家へ連れていき、山のもの川のものをとってきて食べさせました。武四郎が会ったときには、チユヒリカがとらえた2頭の子グマが家のそばで飼われていたといい、武四郎はそのおどろきを記しています。（敬称略。アイヌ語の名前は、すべて武四郎によって書かれた表記にしています）



狩りをする女性 チユヒリカ（江戸時代）

男性の仕事も家族のために

世界のいろいろな国や地域の文化には、それを「男性がやる」か「女性がやる」かが決まっていることがあります。

日本には「女人禁制」という言葉があり、すもうの力士のほか、お酒造りや神社の神主などは男性がやるものとする時代が長くありました。

アイヌ文化にも、狩りやおいのりは男性がする、お酒造りは女性がするといったルールがあるといわれています。

ただ、「男性がするのがふつう」というのと、「男性しかしてはいけない」のはちょっとちがいます。

チユヒリカのほかにも、狩りをする女性は何人もいました。夕張川近くに住んでいた14歳の少女サクアンは、両親や兄弟、近くに住むおばあさん、ひいおばあさんのために魚をとり、畑で豆やカボチャ、アワ、ヒエを作りました。寒さが厳しいときには犬を連れて山へ入り、シカやクマをとって、その毛皮をお年寄りに着せて、いたわりました。

日高の門別でくらしたシアヌという33歳の女性は、歯が弱った父親のために弓でシカをとり、やわらかい新鮮な肉を持ち帰りました。

こうした女性をモデルとしたのでしょう。武四郎の記録だけではなく、胆振や日高の昔話にも、家族を養うために狩りをしたり、おいのりをしたりする女性が登場します。